

缺けるは惜むべし。(仁友社發行、價二〇〇)(梅原)

●日本歴史圖錄 第壹輯、第貳輯

國史を讀むもの、常に不便を感ずるものは其參考をすべき適當なる歴史圖錄に乏しきことなるべし、本圖錄は此の缺陷を填さんために企圖せられたるものにして、高橋健自氏を編輯主任に斯界の諸大家を顧問として、歴史の印象を明らかならしむべき遺物遺蹟等の圖版を選び逐次刊行せんとして、今回其第壹及び第貳輯の發行を見るに至りしものなり。第壹輯は拾五枚のコロタイプ版及彩色版一葉を含み、其中には藤原時代貴族の遊樂の狀を偲ぶべき「駒、競行、幸繪、詞」の一部を始めとし、神武天皇陵に就ては正面及側面の寫眞圖、文久三年勅使參向圖、修陵碑拓影等を蒐め、又埴輪の圖に於ては數種代表的のものを選び、奈良朝時代の樂器にては笙、篳、阮、箏、篋及竿等を表はし。其他空海、平治亂、源賴朝、大坂陣、朱印船、鎖港談判使節、元祿風俗、靈法制定、神樂、石燈籠等各種方面の事物に對して興味ある圖錄を收めあり。第貳輯に於ては、鎌倉時代の射藝として「男衾、三郎繪卷」の一部をとりて彩色版にせるを初めとし、以下仁徳天皇陵に關するもの數圖、鳥毛立、女屏風、後三年の役、鳳凰堂の各部より天主教修好條約、彰義隊等に關するものに及び凡て七十二個の圖版あり。第壹、第貳輯共に別に三十餘頁の解説書を附して各圖に就いて親切なる説明

を施せり。總じて其の材料の選擇及び各圖の配當に於て編輯者の苦心の察すべきものあり、只一葉の中に關連する數箇の圖版を收めんとしたるものありて爲めに圖の稍々小に過ぎたる如きものあるは、費用の關係もあるべけれど、此種圖錄としては望外の感を懷く者少からざるべし、然れども本圖錄は我國文化の各方面に互り信據すべき材料によつて參考圖を提供せんとするものにして世上容易に見るを得ざるものをも集めたるを以て實に國史の教育に於て其用多きのみならず、一般家庭に於ても好尚鑑賞の料たるを失はざるものなり。(東京市麴町區元園町歴史參考圖刊行會發行、非賣品、會員頒布〔西田〕)

●祖先祭祀と日本法律

法學博士穗積陳重著 穗積殿夫譯

本書は著者が明治三十二年羅馬にて開催の萬國東洋學會席上試みたる講演の原稿 Ancestor Worship and Japanese Law の訂正増補第三版の邦譯なり。凡て三編十六章及び附錄二編より成り、緒論には世界に於ける祖先祭祀の過去及び現在を叙し、第一編祖先祭祀概論には祖先祭祀は父祖に對する敬愛が其起因にして、又社會生活の起原は實に祖先祭祀に外ならずと論じ、第二編日本に於ける祖先祭祀には日本に皇祖の祭祀と氏祖の祭祀と家祖の祭祀の三種あるを叙し、第三編祖先祭祀と法律の條には日本の政治

は祭政一致にして、政體より見れば神權的、家父權的、立憲的を兼ね、一の「パドック」に似て而も事實なる所以を論じ、又皇室祖先の祭祀は國民的祭祀なる事を述べ、我國の憲法、皇室に關する規定、古代「氏」に關する規定、近世の「家」に關する民法を始めてめとして婚姻法、養子法、養子離縁法及び相続法等、我國に於ては悉く祖先祭祀を其根本義としたる所以を論ぜり。附録一、養子正否論には古來學者の之に關する議論を擧げ、概ね儒學側は異姓養子を非とし、國學者側は之を是認せる事を叙し、第二、由井正雪事件、徳川幕府の養子法に於ては徳川幕府が政策として養子法を嚴酷にし、譜侯特に外様大名の斷絶を謀りたるに、其結果として浪人を輩出し遂に天草事件に次いで由井正雪事件を誘致せるに驚きて其政策を一變したる事を述べたり。〔清原貞雄〕

●極東の民族

中村久四郎著

本書は徳富猪一郎氏鑑修法學博士吉野作造氏編輯の下に成る現代叢書第二期の最終巻として刊行せられ、極東諸民族の歴史、本態性情、現状を解説したるものなるが、主として漢、滿、蒙、回藏の五民族に就て説けり、其の主なる表目を摘出せば、第一章序論にては極東民族問題、極東の字義及び範圍第二章漢民族にては漢族西來の説、上古漢民族の對抗民族、三代秦漢乃至明清各時

代の漢民族、漢人民族性、西洋人の漢人觀察第三章にては滿蒙回藏の四民族の消長盛衰等あり。各章何れも著者が専門の學術的見地より穩健なる學說を採用し平易簡潔に記せるものなれば極東の天地が今や政治、經濟、學術、乃至軍事上に於て東西諸國より注目環視せられつゝある折柄、讀者を裨益する少からざるべし、卷末に人名地名索引、事項索引を附せるは用意周到なり（民友社 價一、二〇）

●第貳回支那年鑑

東亞同文會發行

支那各般の事項が數字の說明に於て缺如したる所多きは支那史研究者の最も遺憾とする所、従つて支那に於て統計的材料を得むとするには思はざる苦心を要するば云ふ迄も無し。東亞同文會茲に見る所あり、明治四十五年より年鑑の編纂に着手し、今回其第貳回のものを出すに至れり。一千餘頁に亘る大冊にして面積、人口、政體、政治、財政、公債、外交、陸軍、海軍、農業、工業、商會、會社、鐵道、水運、郵便、電信、銀行、保險、外國貿易、人名錄、新聞の二十二項に分類し、各項簡潔なる記述は苦心收得せし統計表と相俟ちて支那研究者を裨益する所甚大なるを信ず（同會、價五、〇〇）

●印度佛敎史

馬田行啓著